

## 大湫(おおくて)宿～大井宿 11.5km を歩く

4月7日今年になって初めて中山道を歩きました。3月は行事も多くなかなか予定が組めませんでしたし、かなりの大雪が降って大湫宿の文化財に登録されている家が破損したニュースもあり、なかなか足が向かなかったのです。今頃なら桜の花も楽しめるのではと、いつもの4人で出かけました。

### ぎゅうぎゅうづめの武豊線

東浦を7:38の区間快速は名古屋勤務のみなさんが乗る通勤列車だ、石浜・緒川・森岡で多くの人が乗りこみ、大府ではさらに多くの人に乗ってきた。私は運転室の仕切りの角に押し付けられて身動きが取れなくなった。列車が揺れる時には角に押し付けられてとても痛かった。現役時代にもこんな満員列車に乗った経験はなく、皆さん大変な思いをして通勤しているのが今になって実感できた。武豊線は今まさに電化工事が進められており、来年の春ころには電車が走る予定だが、そんなことよりも通勤のラッシュ時間くらいは4両ではなく、6両連結で走らせるなど乗客サービスをしてほしいものだ。でも、毎日利用しているお客さんが声を上げなければ改善されることはないだろう。なにしろJR東海は、目前に迫るリニア新幹線のことで頭がいっぱいなんだろうから。

金山で乗り換えるも、通路は人人であふれておりスムーズに歩けないのはもちろんだ。ダイヤ通りなら4分の乗り継ぎ時間があるのだが、間違いなく乗車していた友の姿がなかなか見えない。中津川行き快速が入線してきたときに、やっと階段上に友が現れた。そして、乗客がすべて乗りこんだところにドア前に到着し、間一髪セーフ。

### 走る電車からの花見は最高

乗りこんだ中央線の快速も満員だったが、鶴舞・千種と停車したらいっぺんに客が減ってしまった。要はここまでが大都会と言うことなんだろう、その後は春日井・高蔵寺・多治見・土岐・瑞浪と「市」を走りぬけて行く。ここまでも駅近くには桜の花がきれいに咲き誇る景色があちこちに見られたが、山あいに来るとあちらの山、こちらの山にも緑のなかに薄紅色の桜が見られ、とても美しい眺めだ。加えて、ところどころに赤い鮮や

かなつつじの花も咲いてとても見事だ。やはりこの時期に来たのは正解だったようだ。今年もあえて花見には出かけていないが、電車の中から移り行く花々を眺められるのはとても贅沢な最高の花見になった。

## 旧中山道まではタクシーで

9:00 に釜戸駅着、今回は大湫宿の外れまでタクシーで移動する。しかし駅舎を出るもタクシーが見当たらない。大湫宿と大井宿の間は 13km だが十三峠を越えるきつい行程だ、そこで 2km ほど大井宿寄りまで行き、きょうは 11km 程歩き次回に 6km しかない大湫宿と細久手宿の間は、きょうの 2km と合わせ 8km ほど歩いて細久手宿まで歩くことにしたのだ。

タクシーは見当たらなかったが、看板があり「ご用命は下記へ」とあって電話番号が記されていた。するとそこへ大湫病院と書かれた中型バスがやってきて、先ほどの電車を降りた 2 人が乗りこんだ。どうやらこのバスが走ることでタクシーの需要が減り、常駐しなくなったと思われる。そんな話をしながら電話をすると、直にタクシーは来てくれた。事情を話して大湫宿から少し大井宿寄りまでお願いした。大湫病院の中型バスがどの辺りまで行くのか、後で確認してみると大湫病院は旧中山道を細久手宿の方へ少し行ったところであり、どのみち利用は無理であった。

地図で調べられたのは中山道ゴルフ場があり、その近くまでは車道があるはずなので大丈夫と今回の計画にしたしだい。そして、運転手さんが止めてくれたのもゴルフ場の隣で旧中山道と交差する地点であった。



整備されている中山道



尻冷やし地蔵

## 中山道の往時をしのぶ「三十三所観音石窟」

9:25 中山道と東海自然歩道の案内看板を見て、道幅がかなり広く整備された街道を歩き始めた。今日歩く大湫宿と大井宿の間の三里半(13.5km)は険しい山坂が 20 ほど連続する「十三峠」と呼ばれる尾根道で、中山道を行きかう人馬が難渋した中山道でも難所のひとつでした。5 分も行くと石碑とお地蔵さんが現れる、「尻冷やし地蔵」で文字が読みにくくなった説明板と石碑が立ち、そんなに大きくはない地蔵さんがある。この場所から清水が流れ出ている、地蔵の尻を冷やしているように見えるので「尻冷やし地蔵」と呼ばれるようになったとか。ここ十三峠では水場も少なかったため、お助け清水とも呼ばれて重宝がられていたようだ。

お地蔵さんから少し先には石窟が現れた、そこは「阿波屋の茶屋跡」と言われる場所で石を積み重ねて格子の扉がついた立派なもの。「十三峠の三十三所観音石窟」と呼ばれ、道中の旅人の安全を祈って天保 11 年(1840)に建立された。33 体の馬頭観音は大湫宿内の馬持ち連中と助郷にかかわる近隣の村々からの寄進によるもの。尚、石窟前の石柱には大手運送業者の定飛脚嶋屋・京屋・甲州屋をはじめ奥州・越後の飛脚、松本や伊那の中馬連中が出資者に名を連ね、中山道の往時をしのばせる貴重な史跡でした。



「十三峠の三十三所観音石窟」



私も今日のウォーキングが何事もなく、安全でありますように手を合わせました。そこから歩を進めると、「曾根松阪」と彫られた石碑とその先では「びあいと坂」と書かれた白い柱が立っていた。それから先でも坂の名を書いた白い柱がいくつも現れた。特にこれといったものがない坂道では、坂の名前を記すくらいのことしかないようだ。それでも、これだけきちんと表示があることはすばらしい。とっていると、道端に少しカタ

クリの花を思わせるようなピンクの小さな花が咲いていた。その時は分からなかったが、あとで調べて「ショウジョウバカマ」と分かった。それから先でも水のある場所に群生しているのが見られた。



「権現山一里塚」



「ショウジョウバカマ」

## 「権現山一里塚」から炭焼き立て場跡

次に現れた石碑には「中山道巡礼水」と彫られていた。この地にはお助け清水・巡礼水と呼ばれる小さな池の跡が残り、上段には宝暦7年(1757)銘の馬頭観音が祀られています。その昔旅の母と娘の巡礼がここで病気になったが、念仏によって目の前の岩から水が噴き出し命が助かったと言い伝えられています。そのためこの辺りの坂は「巡礼水の坂」と呼ばれており、それを過ぎるとゴルフ場のグリーン横を通るためボールよけのネットが張られている。と、そこここに白や黄色にピンクのゴルフボールが落ちていた。

その先5分ほどで「権現山一里塚」に着いた、江戸から90番目の一里塚で「檜の木坂一里塚」とも呼ばれた。道の両側に塚が残されていて、塚の下の方にはさきほどのショウジョウバカマがここでもきれいに咲いていた。そこには檜の木坂の石碑もあって、杉林の中に石畳を敷いた下りの坂道が私たちを待っていた。

一里塚の前で記念写真を撮り、坂を下ると直に視界が開けて山田が現れる。のどかな風景に浸りながら歩くのは吾郎坂で、坂の名を記した柱付近と溝にもあのショウジョウバカマがかたまって咲いていた。先ほどらい鶯の鳴き声が聞こえさわやかな気分であったが、今度は蛙の鳴き声が聞こえてきた。最近では地元の生路も都会化して、蛙の鳴き声は聞くことがなくなり、とても懐かしく田舎を歩くにふさわしい。山田の先には2.

3軒の民家がある、こんな山の中なのに生活する人もいるのかと感心した。家の前には「炭焼き立て場跡」の説明板があり、それによると太田南畝が享和2年(1802)に書いた「壬戌(みずのえいぬ)紀行」に、「俗に炭焼きの吾郎坂を下れば炭焼きの立て場あり左に近く見ゆる山は権現の山なり」という記述があります。ここは眺望に恵まれていたので、十三峠の中では特に旅人に親しまれた立て場でした。

看板のすぐ先には高見に向かって石段が続き、入り口には神社の石柱がある。と言うことはこの集落も昔はもっと多くの家があったのだろう。



鶯の鳴き声が聞こえる山田



大久後の観音堂と弘法様

## 坂と茶屋と観音様

民家を離れると鞍骨坂、権現坂と下り、7分程行くと、街道から一段高い所に大久後の観音堂と弘法様が現れる。祠の隣には桜ではなく大きなアンズの木があって、薄いピンクの花がきれいに咲いており、すばらしいアングルに思わずカメラを向けた。観音堂のすぐ先には民家があり高低差を利用し石垣を背景にした池と、石灯笼やきれいに刈り込まれた木々の和風庭園がすばらしかった。その先に大久後の駐車場と言う看板が立つ広場があった。この辺りへ車で来る観光客はいるのかな?と思ったが、駐車場が整備されているのは、非常時に役立つことだろう。

少しばかり開けた畑を見ながら行くと、「灰くべ餅の出茶屋跡」の柱があった。変わった名前だが、おそらく藁かなにかで焼いた餅を出す茶屋があったということなんだろう。それに、出茶屋と言うからには茶屋の分店みたいなものか。次は観音坂で説明板があり、ここは瑞浪市の東の端で釜戸町大久後地区。坂の途中の大きな岩の上には、道中の安全

を祈る馬頭観音様が赤い帽子と赤い前掛け姿で立っている。坂の西には天保2年(1841)銘の「四霊場参拝記念碑」が立っていた。そして、西に連なる権現山の山頂には先ほど見た階段の先に荇安神社が祀られている。観音坂を過ぎると山田の広がる開けた場所に出た。出発して1時間15分ほどになり日当たりも良いので少し休憩した。



道中の安全を祈る馬頭観音様



恵那市に入ると大きな石碑と説明板

## 中山道を通った大名は前田家など30家

出発すると「大久後の向茶屋跡」の柱が立ち、坂を下って武並地区へ入っていく。平坦な道になり少し歩くと、中山道の大きな石碑が立っている。この辺りから瑞浪市を離れて恵那市に入っていく。そこに中山道の説明板があり、中山道の概要や特徴が記されていた。それによると、中山道は慶長7年(1602)江戸幕府によって整備が始められた、いわゆる5街道の一つ。江戸から京までだが草津から西は東海道を通るので、中山道自身の道程は武蔵、上野、信濃、美濃、近江を通る山道で、江戸日本橋から草津まで67宿、128里13町3間(約504km)。当時中山道を通ることになっていた大名は加賀の前田家、美濃苗木の遠山家、美濃加納の永井家など30家であった。これは東海道を通る大名家に比べれば1/5である。中山道は姫街道とも呼ばれ、皇室や公家の姫君が将軍家に嫁ぐときには必ず通行する街道であった。中でも文久元年(1861)和宮の降嫁は中山道始まって以来の大通行であったことが知られている。

説明板のところから山道は上りになり、みちじろ峠を越えて行くと「ばばが茶屋跡」の碑を見てみつじ坂を下る。すると、いただきに白い雪が残る恵那山の雄姿が飛び込んでくる。友の曰く、この時季に恵那山に雪が残っているのはとても珍しい。そんな恵那山

を眺められるのも幸運と言えよう。

## 深萱立場と藤村高札場

恵那山を見て少し行くと西坂で、そこに「ちんちん石」と書かれた柱が立っていた。気になって周りを探してみるも見つからない。細い道に分け入って見たが、そこにはお墓があったが石はなかった。あきらめて坂を下っていくと農地が広がる所へ出た、民家も散見され遠くには工場も見える。畑ではトラクターが作業している、民家の近くまで行くと立派な説明板があり、ここは「深萱立場」で街道に何があるのか、立場、立場本陣、高札場等が詳細に記されていた。立場本陣は和宮や多くの姫君、大名行列の殿様がお休みになった所という。



深萱立場本陣の写真



高札場

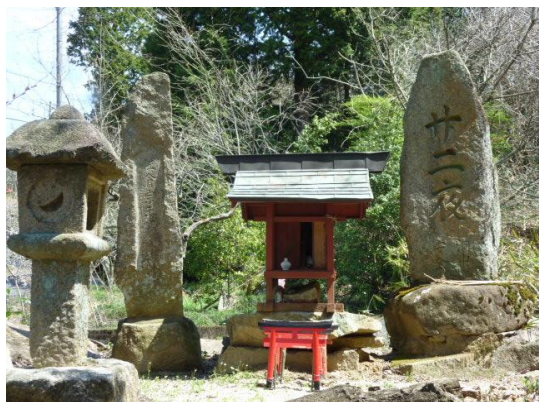
田舎道から自動車道にでたところに深萱立場の説明板があった、そこには加納家が務めた立場本陣の写真があり、立派な建物であったことが分かる。そのすぐ先道沿いの少し高くなった所に高札場が復元されていた。ここにはキリシタンと火付けに関する2枚の高札が当時の大きさと掛けられていた、と恵那市教育委員会の説明がある。

## 義民の名を借りた大明神

高札場を過ぎると大通りを離れ、小さな川を渡り道は上り坂となる。2・3分も行くといく赤い鳥居が何本も並び、「佐倉宗五郎碑」の文字がくっきりと小さな柱が立っている。

左に分かれる道があってそこには立派な常夜灯があり、右手にはいくつかの碑があった。碑の前まで行き確かめると、「佐倉宗五郎碑」と「二十二夜」の碑がありその真ん中には小さな社があった。二十三夜の碑は見るが、二十二夜は珍しい。この佐倉宗五郎というのは義民で有名な下総国印旛郡の人物。何故ここに名前がでてくるかというと、元禄年間岩村藩で農民騒動が起き、竹折村の庄屋田中氏は将軍に直訴して農民たちを救ったが、打ち首になり村人たちが密かに田中氏を宗五郎大明神として祀ったのだと言われている。つまり、この地の宗五郎だとして祀ったということ。

二十二夜は22日の夜に人々が集まって、飲食をともにして月の出を待つ月待ち行事を行った女人講中。全国的には二十三夜が一般的で、二十二夜は埼玉県北西部から群馬県の中西部に多いという。本尊の如意輪観音は、人々の願いをかなえる観音様として江戸時代中期以降、民間信仰に広くとりいれられた。



「佐倉宗五郎碑」と「二十二夜」の碑

碑のところから5分程行くとそこは黒すくも坂、そして馬茶屋跡、うばが茶屋跡を通り過ぎると「ぼたん岩」の手製の看板があった。それには、400年前からぼたん岩として多くの人に踏まれ親しまれてきた。科学的にもオニオンクラックと呼ばれ、タマネギ状の標本として珍しい物であった。言われてみれば確かに、ボタンの花ともタマネギの切り口とも見える。

## 両側に塚が残る紅坂一里塚

ぼたん岩を過ぎると「うばヶ出茶屋屋跡」の柱があり、そこから4分も行くと視界が開けて農地が現れ、道の両側に紅坂一里塚が現れる。左手の塚には木はなくて、右側の塚にはさほど大きくはないが木が植えられている。街中の一里塚と違い殺風景ではあるがいたしかたない。時間も丁度良いころなのでここでお昼にすることにして、草原に腰をおろした。鶯の鳴き声を聞きながらまだ耕していない山田を見て、青い空の下で食べる昆布のおにぎりはことのほか旨かった。おなかも満たし春の日差しは心地よいことこの上ない、そんな気分になることができた。





紅坂一里塚



虫取りの少年たち

一服して歩き始めると高圧線の鉄塔の向こうに恵那山がくっきりと浮かんでいた。そんな道に「びやいと茶屋跡」の柱があって、山田の脇の道には芝桜や名も知らぬ草花がきれいだった。そこから5分も行くと数人の人が見える、近づくと4人の少年が倒木のそばで何かしている。何をしているのか声をかけると、「手塚治虫(おさむ)の治虫(おさむし)をさがしている」という。でも、もともとはギフチョウの調査に来たと言う。へえーそんな虫は知らないが、友が「学校はどうしたの」と聞くと、終えてから来たと言う。ゲームで遊ぶ子供が多い中こういう活動をしている子供がいることに安堵した。

その先の「かくれ神坂」の案内を見て10分程行くと集落があり、「うつ木原坂」でそこに恵那市社会福祉協議会の武並支部があった。見るとトイレのマークがあったので立ち寄りお借りした。坂道の脇には桜の木が何本もあり、花はまだ六分咲きといったところだった。

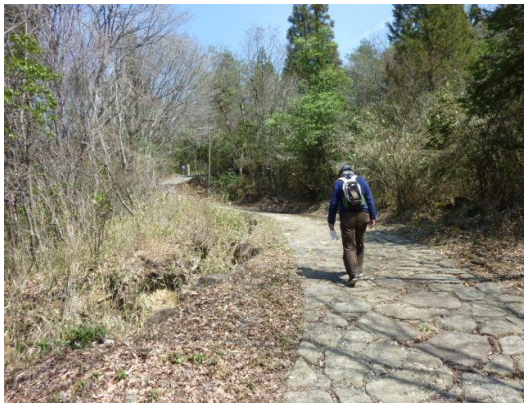
## 女の人の裾も乱れる急な坂と首なし地蔵

うつ木原坂から数分歩くと小さな川にぶつかる、その手前はわりと平らな所だったが、畑になっていて石が積まれた段々畑だった。途中にも雑木林の中に、昔の段々畑の名残りである石垣のみが残っていたが、わずかな土地でも有効に活用する努力がされていたことが分かる。ところで、この川はみだれ川と呼ばれ昔は石も流れるほどの急流だったとか。そこで飛脚たちが出資して宝暦年間に橋を架け「みだれ橋」あるいは「祝い橋」と呼ばれ、荷を積んだ馬一頭につき2文徴収する有料橋だったという。

この橋を渡るとみだれ坂で、坂が大変急で大名行列が乱れ、旅人の息が乱れ、さらに

は女の人の裾も乱れるほどだったことから「みだれ坂」と呼ばれるようになったとか。昔の人はセンスがあり、なかなかおもしろいネーミングであると思った。その坂道はかなり幅も広く、石畳が敷き詰められ周りの景色に溶け込んでおり美しいと思った。

みだれ橋から 7・8 分も行くと首なし地蔵がある。この地蔵は宝暦 6 年(1756)地元の人たちが、旅人の道中安全を祈って建てたもの。そして、こんな話が残っている。昔中間二人がこの地蔵さんの隣で休憩した、夏の暑い日でそのうち二人は眠ってしまった。しばらくして一人が目覚めると、隣の仲間が首を切られて死んでいた。びっくりして辺りを見回したが、それらしき犯人は見つからなかった。怒った中間は「黙って見ているとは何事だ」と腰の刀で地蔵の首を切り落としてしまった。それ以来、何度も首をつけようとしたがつかなかったという。今は首のある地蔵さんとともに立派な屋根つきの祠に納まっている。



みだれ坂



首なし地蔵

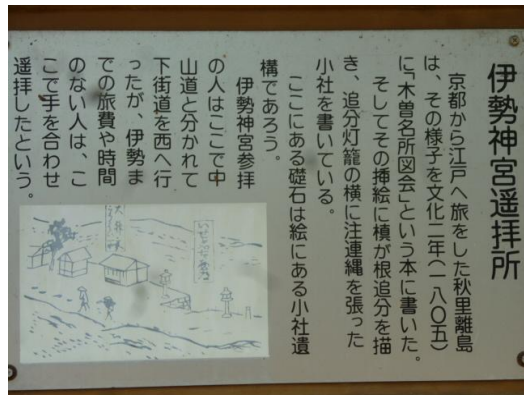
## 槇ヶ根立て場から伊勢への近道があった

首なし地蔵から 3 分も行くと左手の少し高い所に「姫御殿跡」の看板が見えた。和宮の御殿とは違うようなので上って確かめてみた。その説明には「ここを祝峠といい、周囲の展望がよいので中山道を通る旅人のかっこうの休憩地だった。この近くに松の大木があり松かさ(松の子)が多くつき、子持ち松といった。この子持ち松の枝越しに馬籠(孫目)がよく見えることから、子と孫が続いて縁起がよい場所とされた。文化元年(1804)12 代将軍家慶のもとへ降嫁した、楽宮(さざのみや)の通行の時仮御殿を建てた。文久元年(1861)和宮の時には御殿を建てた。以来、地元の人たちは姫御殿と呼んでいる」…とあ

った。縁起の良い場所に御殿を建てたと言うのが、昔の人らしいと思った。



榎ケ根立て場跡



伊勢神宮遙拝所の説明

ここから 10 分程行くとちょっとした広場に出た、「榎ケ根立て場跡」「下街道」「伊勢神宮遙拝所」などの看板が立っている。つまり追分だったので茶屋があり、ついでお伊勢さんのお参りもできる場所だったということである。この下街道と言うのは、中山道を上街道といい、分かれて下る道を下街道と呼んだ。下街道は竹折、釜戸から高山(現土岐)・池田(現多治見)を経て名古屋へ行く道で、名古屋までの距離は上街道より四里半(約 18km)も近かった。そのため商人や伊勢参拝の人たちでにぎわった。しかし、幕府は中山道の宿場保護のため通行を禁止し、尾張藩も厳しく取り締まったが徹底することができず、幾度も訴訟を繰り返したと言う。そもそも中山道の整備は慶長 7 年(1602)徳川幕府役人大久保石見守を総奉行としてなされた。その時の道はここから西に下り竹折、釜戸を経て御岳へ出た。その翌年ここから西へまっすぐ行く道が改修され、慶長 9 年(1604)十三峠を越す道が完成し、大湫宿が設置されたのだ。

ここ榎ケ根立て場には江戸時代の末頃、榎本屋・水戸屋・東国屋・松本屋・中野屋・伊勢屋など茶屋が 9 軒あった。これらの茶屋は明治 35 年中央線に大井駅が開設されると姿を消していった。また伊勢神宮遙拝所というから、昔は視界が開けて見晴らしが良かったのだろうか? 今は見晴らしが利くわけでもなく、周りは木々に囲まれてしまっている。しかし、昔は先を急ぐ人たちは寄り道をせず、街道から伊勢の方角を向いてお参りを済ませたということだ。

## 恵那山を望む絶景と榎ケ根一里塚

立て場跡を過ぎると、説明にあった茶店の松本屋、水戸屋、榎本屋跡を示す柱がつつぎつつぎにあった。そして、街道は一旦自動車道を進み少し先で旧道に入っていく。15分も歩くと恵那市市制35周年記念事業として整備された「桜100選の園」に着く。大きな石碑と桜が見え、桜の枝と石碑の間からは遠くの恵那山が望まれるビューポイントだ。思わず2・3枚シャッターを押した、それからゆっくり見てみると頂の白い恵那山をバックに恵那の町を望むことができる。尾根を少し下って周りを見渡せる場所にはベンチや東屋が整備されていた。しかし、桜はそんなに多くない。石碑のある場所から少し先にも、東屋らしきものが見えたので進んで行くと、東屋の後ろに榎ヶ根一里塚があった。

一般的には一里塚は慶長9年(1604)徳川幕府が、江戸日本橋を起点に東海道、中山道など主要な街道に設け制度化させた。岐阜県内の一里塚は、全部で32か所あったが、現在はそのほとんどが取り壊され、現存しているのは恵那市内の榎ヶ根一里塚、紅坂一里塚と瑞浪市内の権現山一里塚など五ヶ所の併せて七ヶ所にすぎない。ここ榎ヶ根一里塚は北の塚が高さ3.5m、幅は9.9m、南塚は少し大きくて高さ3.9m、幅は10.1mある。塚の上に植えられていたと言う榎は両塚とも残っていない。近年の土地開発が進む中でこの付近の中山道は開発をまぬがれて、原型をとどめ往時を偲ぶことができる。とても貴重な史跡であり大切に保存したいものだ。



桜100選の園から見る恵那山



榎ヶ根一里塚

一里塚の前にあるベンチに腰をおろし、一時の間すばらしい景色に身をゆだねて休憩することができます、とても幸せな気持ちに浸ることができた。

## 西行塚と西行硯水



一里塚をあとにして15分程行くと「西行塚」がある、街道から少し入った所にあり途中には芭蕉の句碑と西行の句碑がある。恵那市教育委員会の説明板には岐阜県指定文化財とある、それによればこの塚は西行法師の供養のために造られたとされています。

高さ1.4mの五輪の塔が立っており、室町時代末期のもので推定されています。西行はこの地で亡くなったと言われており、慶長19年(1614)に書き写された、恵那市大井町長国寺に伝わる「長国寺縁起」に終焉の様子が細かく記されています。この塚は江戸時代の出版物に登場し古くから中山道の名所の一つとして有名で、今も大切に祀られています。

塚の奥には東屋もある立派な展望台があり、恵那山や南アルプスも遠望する絶景が眺められます。

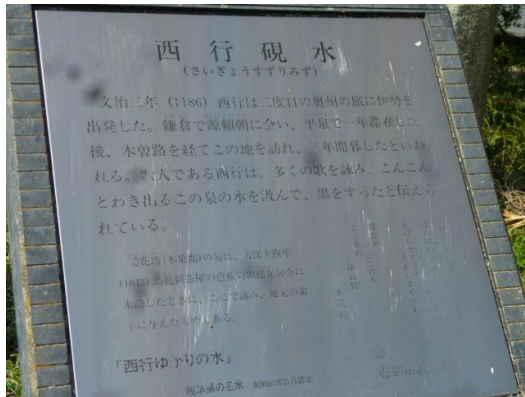


「是より西 十三峠」の石碑



踏切と恵那山

西行塚をあとにして5分も行くと中央高速道にぶつかり、高速道に沿って桜の咲く坂を少し下るとそこに「是より西 十三峠」の石碑が立っていた。やれやれ、東へ行くわれわれはようやく十三峠を越えることができ、残すは恵那駅まででありほっとした。高速道をくぐり中央線の踏切まで行くと、遮断機の手前の土手にはタンポポと水仙の花がきれいに咲き、その背後に恵那山がくっきりと浮かび上がっていた。



「西行硯水公園」

踏切を渡ると大井宿の立派な説明板があり、そこから3分も行くと満開の大きな桜の木が現れる。「西行硯水公園」で小さな公園だが、東屋もあり桜の木1本と松の木1本と石が組み合わせて造られている。石のそばにはカタクリの花が咲いていた。西行は文治2年(1186)二度目の奥州の旅に伊勢を出発した。鎌倉で源頼朝に会い、平泉で1年滞在した後、木曾路を経てこの地を訪れるが、衰弱して3年間暮らして亡くなったと言われる。多くの歌を詠み、こんこんと湧きでるこの泉の水を汲んで、墨をすつたと伝えられている。

ここから少しで恵那駅に14:30到着し、駅前の喫茶店「まいか」でコーヒーを飲みながらいつものように休憩した。今回のウォーキングで、タクシーを旨く使えば大湫宿と細久手宿の間と、さらに細久手宿から御嵩宿までも一泊することなく歩けそうなので一安心した。